

昭和二十五年一月

北海道庁に再就職、北海

道苫小牧林務署に勤務、

その後旭川、滝川、函

館、当別各林務署に勤

務、北海道林務部を最後

に昭和五十六年三月勅撰

退職

現在の動向

札幌市厚別区の現住所において、妻と詩吟及び社交ダンスの共通の趣味を持ち、関係団体において会員等の指導に当たっている。

(北海道 北野 實)

シベリア抑留記

岩手県 山本 喜代四

一、民主教育始まる

昭和二十二(一九四七)年二月、大隊長も変わり、

各小隊の隊長が民主委員になり、委員長には講習を受け転属してきた原田という人が就任した。それからは朝の点呼のときの訓示は大隊長ではなく民主委員長が行うようになった。原田は某大学を卒業しているとかで演説が上手だった。

演説は朝の点呼のとき、五分から十分くらい毎日行われた。第一の演説は、「諸君、青年行動隊を見ろ、何か感ずることはないか。階級章を付けてないだろう。もう軍隊はないのだ。我々は平等なのだ」と、こういう具合だった。翌日にはもう階級章を付けているものは誰一人いなかった。

六月頃になって、食堂の一隅に図書室が設置され、マルクス、レーニン、スターリン等の書籍が自由に見ることが出来るようになった。また、劇団も出来て演芸会も行われるようになり、プロの音楽家もいたように、マンドリンの上手な人もいた。

各ラゲルには畳一枚から三枚分くらいの大きさの壁新聞が張り出された。プロの画家や絵かきがいいたらしく、かなり上手な絵が描かれていた。スローガン

は、「ファシズムとの闘争なくして民主主義なし」とか「ソ同盟社会主義万歳」「レーニンの旗の下に、スターリンの指導の下に」等であった。

文面は日本新聞よりの転載が主であった。また、このころ捕虜用往復郵便はがきが一人一枚ずつ支給された。往信はカタカナで書くことになっていて、私も早速父あてに出した。帰国したら、そのはがきが届いていて、父が大切に保管してしてくれた。父は返信を出したと言っていたが、それから二年以上もシベリアに抑留されていたが私には届かなかった。

中には、相当の月日が経って届いた者もいて、その文面には、弟も今春から元気で中学校に通っていますというのがある、その者はブルジョアとしてつるし上げられることになる。このことは民主裁判とつるし上げの項で書くので省略する。

作業の方は路盤の拡張が主で、駅舎の建築に一小隊、冬用の薪取りに一小隊、我々青年行動隊は作業の遅れている現場に駆り出された。

入院患者も多くなり、二十一年、二十二年で千人近

くいた大隊員が五百人くらいになっていた。その大部分は、元気で他の部隊に転属になったのではなく、病院に入院したためであった。再び帰ってこないところを見ると、死亡したか、または、日本に帰ったかである。

ガンガラのことであるが、この三一五収容所でも全員ガンガラを持っていて、六、七、八月とガンガラ様に命を助けられたのである。日本にあるワラビ、フキ、シドケ等の山菜には一度もお目にかかったことはなかった。シベリアにはないのかもしれない。あるのはヨモギ、アカザを主体とした野草である。キノコだけは同じものがあるが大いに助かった。(ガンガラは野草をゆでるため使用した。一人五個ぐらい持っていた)

十月に入った頃、委員長が、「山本、ハバロフスクに行かないか」と言う。三一五からは五人くらい行けると言う。私は三〇四収容所るとき、顔、喉が凍傷になって、寒くなれば話すことが困難になるので辞退した。それならば、当分の間、日本新聞の解説委員を

やってくれないかというので、これだけは引き受けることにした。この頃になると、日本新聞は月に三回くらい全員に一部ずつ配付されるようになった。読み終えた後は、タバコの紙巻に使われた。タバコも少量ではあったが時々配給された。

さて、日本新聞解説委員というのは、休日に食堂か各部屋に二百人くらい集合させて日本新聞の内容を解説する仕事であった。一回につき一時間くらい要したので、夏なら広場で大隊員全員を集合させて一回でよかったが、十月ともなれば外ではできないから、それで室内で二回か三回に分けて行った。当時はまだ委員長だけが作業免除であり、副委員長格であった私を含めて他の委員は作業に出ていた。

十一月になって、ハバロフスクに行っていた五人が講習を終えて帰ってきた。今まで小隊長が兼務していた民主委員は小隊長専任となり、委員長以下講習から帰ってきた五人と私を入れ計七人で民主委員を構成することになった。この時から民主委員は重労働免除となり、専ら民主主義運動に専念することになった。

十二月末頃になって、寒さも毎日零下三十度以下になり、私も喉から自由に声が出せなくなった。委員長に辞任を申し出ると、事情を察してくれて快く承諾してくれた。

翌日、作業に出るため整理していたら、委員長が来て「山本、どうした、作業に出なくてよいから委員長室まで来い」と言う。室内に入ったら、解説委員は他の委員にやってもらうが、委員は今まで通りやってくれ。仕事はたくさんあるし、それに、同志山本、これから寒さが増してくれば、凍傷がますます悪くなるだろう、ラীগелにいれば室内の仕事もたくさんあるからと言う。私は民主委員も辞任したものと思っていたが、委員長の厚意を受けることにした。

そうこうしているうちに、昭和二十三年一月一日を迎えた。一、二、三日と三日間の休日である。民主委員会の結果、講習帰りの人は元旦だけ休んで、二日、三日は講義をやると言う。委員長は、二日は午後から演芸会があるし、三日の日の一日くらいは何もせず、一年分の休養だと思って休もうと言う。山本はどうだ

と聞くので、私は三日の日は何もしないで一日くらいは休んだ方がいいだろうと言った。俺自身も休みたいし、大部分の隊員もそうだと思うと言った。他の委員は不服そうであったが、委員長に従った。

さて、二日の日になった。朝食後まもなく食堂に演芸部長の渡部君の指示で委員全員で演芸会の舞台作りが始まった。食堂には一度に全員は入れないので、二回に分けて公演することになった。一回の公演に三時間くらい必要だといふので、午後からでは二回目の公演のときに暗くなると困るといふことで午前十一時頃から始めることにした。

昼食はパンだけなので見ながら食べることにして、早速公演である。最初は流行歌から始まった。楽器は手作りのギター、マンドリン、三味線、笛、太鼓の独演、最後は、女装の婦人、それも和装の美人である。誰もこれが男だとは思わなかった。全くよく化けたものである。拍手喝采がどよめきに変わった。あとで演芸部長に、あの和服はどこで手に入れたのかと聞いたら、あれは某将校の夫人の着物で、将校行李に入れた

ままソ連に持ち込んだものを、あの劇団員がその将校から貰って大切に持っていた物だと言う。よくぞ今までパン等と交換もせず持っていたと感心した。そして赤旗の歌を全員で歌って幕を閉じた。

二回目は、所長（ナチャニック）を初めソ連側の職員も招待し、同じような出し物で公演して、これまた前回以上の拍手喝采であった。

三日の休養も終わり、今まで通りの作業が開始された。民主運動の方も、将校、上級下士官が転属し、講習帰りの民主委員が実権を握るようになった。民主運動のスローガンも「階級闘争なくして民主主義なし」「ブルジョアの追放とプロレタリアートの独裁なくして民主主義なし」等が壁新聞やラーゲルの壁に張り出された。

階級闘争とは、収容所内では将校、下士官、兵の階級と、各人出身階級別に分類された。将校は軍隊でも支配階級であるし、出身も資産家出身が多く、最低でも中等学校は卒業している。日本の社会でも軍隊でも支配階級で我々を搾取してきたブルジョア階級だ。軍

隊で兵士であっても、中学校以上卒業している者は、ブルジョア階級である。また、前歴者といつて、元、前警察官、特務機関員、憲兵も幹部候補生の下士官もブルジョア階級だという。下士候の下士官は軍隊では我々を苦しめ支配階級の手先ではあるが、出身は自分達と同じプロレタリア階級であると勝手に定義づけた。それから各小隊に一、二人のオルグ、アクチープ（ソ連語で実際に大衆の中に入って運動する活動家のこと）を配置すると言う。このようなことは、ハバロフスクの講習で、日本新聞社のソ連最高責任者コワレンコ氏、編集責任者の諸戸（モロト）氏（実名は不明だが、当時のソ同盟外相モロトフ氏にあやかつて命名したとか、されたとかいう風評であつた。シベリア天皇とも言うようになった）等の下請のようにも思つた。

二月に入つて、階級闘争も具体化してきた。作業部長のA委員が、オルグ、アクチープの人選を提案した。B委員はそれに対し、A委員は毎日のように現場に行くので大隊員の顔だけでなく性格もわかっている

のでA委員に一任したらどうでしょうと言う。他の三人の委員もこれに同調した。委員長も意見があつたようだが、五人が意志表示をしている、全員で相談して決めるといつても無駄であることはわかっている。多数の意見だからというので、A委員に人選を委任した。

委員会は毎日のように開かれるが、十日以上たつてもA委員より結果の報告が出されない。委員長はA委員にアクチープの人選はどうなつていのかと尋ねた。A委員は、人選は終わりましたとのこと、そして、このたびのオルグ、アクチープは特別な任務なので、名前は各委員に知らせない方がよいので報告しませんでした。特別な任務というのは、階級闘争においてブルジョアと反動を摘発して、彼らに自己批判と反省をさせなければならぬ。委員の中にも反動がいるかもしれない。大衆に誰がアクチープかわかれば情報も得られなくなる。また、アクチープ自身も困るだろうから、名前は明らかにしない方がよいだろうと言う。講習帰りの五人は知っているかもしれない、皆、

A委員に同調した人だ。会議のときも、委員長と私の意見は反動的だと言う。反動だとはまだ言わなかった。

三月に入って、マダムドクトルの身体検査が行われ、百人以上のOK（オーカ）が出た。間もなくOK全員に転属命令が出た。転属先は知らされなかった。委員長も隊長として転属である。委員長もこのような民主運動にはほとほとあきれていた。近いうちに民主委員と一緒に辞めようと話していたが、とうとう別れのときが来てしまった。

私が思うには、他收容所に転属ではなく帰国（デモイ）ではないかと思った。ソ連側はいつも民主主義者（デモクラート）と作業優良者（ハラシヨラポータ）を先に帰すと言っていたが、事實は作業能力がなくなった者から先に帰しているように思われた。

委員長が転属になったので、次の委員長にはAが就任した。と同時に私は委員を辞任したいと申し出、直ちに受理された。この当時の運動は、ソ同盟の革命前後、特に革命後のスターリンの政策そのものように

思えた。

民主運動というより、権力闘争そのものであった。七十万の頂点に立つシベリア天皇と言われた諸戸氏でさえつるし上げられたとか、ソ連の戦犯にされたとか、最近風の便りに聞いた。数年前にわかったが、諸戸氏でさえその後ソ連の戦犯にされ、昭和三十一年に帰国したという。このように当時のソ連（スターリン）は必要な時は利用して、必要がなくなればばっさり切り捨てられる。それはソ連の人達も同様なようであった。スターリン的風土？とでも言おうか。

二、民主裁判とつるし上げ

さて、Aが委員長となって最初の人民集会（この頃は人民裁判とかつるし上げとか言うようになった）が食堂において開かれた。委員長がまず挨拶をした。

「同志諸君、本日は、我々の敵、ブルジョアジーとその手先を摘発して、自己批判と反省を行わせ、民主運動を更に発展させよう」「ブルは前に出る。中学校以上卒業している者は前に出る」「警察官だったもの

は、前に出る」前後左右、方々から叫ぶ。この叫ぶ者達は皆、Aが選任したアクチーブであることは間違いない。

私は、このような事態が来ることは覚悟していた。

私は前に出た。「後はないか、五小隊のC隊長はどうだ」Cも前に出た。「警察官をした者はいないか、あつたら前に出る、調べはついているぞ」「出なければ引っ張り出せ」「つるし上げろ」、怒声が飛ぶ。入隊前、警察官だったというDも前に出た。

民主委員達は何も言わない。誰が、どういう発言をしると、アクチーブ達に指示していたようで、発言するのはアクチーブだけである。十二、三人くらいいるようだ。ほかの人間は、あつけに取られて成り行きを見守っている。アクチーブがどなった「最初に山本から批判しろ」。私も黙っていられない。「隅の方でどなってないで、どのように批判すればよいのか、前に出て教えてもらいたい」と言った。会場は静かになった。一分、二分、誰も発言しない。委員長が発言した。「中学校以上卒業している者は、多数の者が行き

たくても行けなかったのに、行けたということは、金があつたからだ。金があつたということは、多数の者から搾取したからだ。また、軍隊でも下士官や将校となり、我々を苦しめた。よって、深く反省し、今後民主主義運動のため、我々プロレタリア階級に協力しなければならぬ。このことを皆の前で反省して、表明してください。山本からどうぞ」とのことで、私の発言が始まった。

「私は岩手県北の寒村、鳥海村に大正十三年十一月三日、貧農のそして小作農の長男として生まれ、高等学校校ただはどうか卒業して、普通なら家で就農すべきところだが、水田も一反歩もなく生活できなかったので、東京の工場に就職し、昼間働き夜間工校に通学していたが、卒業前、家庭の事情で岩手の実家に帰り、食糧増産のための事業で農林省営林局から山林を借り受け畑地造成中、村の兵事係（野里四郎）より出頭を命ぜられ、『軍隊に志願するか、または軍需工場に就職するか、君の意見を聞きたい』とのことであつた。そして兵事係は『君は長男でもあるし、工業学校

にも行っているので軍需工場の方が良いだろう」とのことであった。私もそれに同意して、今後の身のふりかたを兵事係にお願いした。十日くらいたって兵事係より『大湊海軍軍需部において、職員を募集しているので受験してみないか』というので受験して、昭和十六年八月一日、海軍軍属として奉職、昭和十九年八月五日付にて休職、同月十五日、第四航空隊に入隊、同日付にて陸軍特別幹部候補生を命じられ、第一期教育終了後、第二期教育のため満州奉天第四飛行錬成隊に転属、その後は皆さんと同じです。任官も終戦後なので、兵士をいじめたり暴行したことは一度もありません。前にも言った通り、私の村は農家七百戸くらいですが、水田の全くない農家は私の家くらいだろう。農家の長男で農業が出来ないで東京に働きに出た者も私だ最初だと思う。これでも私がブルジョア階級の出身でしょう。それとも、他の人達は大ブルジョア階級出身で階級出身者は一人もいないのでしょうか。それでは私の弁明は終わります。A委員長は「事実か否かは後

で調査します。五小隊長のCどうぞ。」

Cも弁明に立った。「私は東京の出身です。中学校は卒業しておりますが、私の小学校の半数以上は中学校を卒業しております。中学校を卒業しても自分の家を持っていない者も多数います。私も、私の父も借家住まいです。委員の皆さんも、家はないですか。スターリンはともかくレーニンは何階級出身ですか。誰がブルジョアとプロレタリアの区別をつけたのですか。このラゲルにいる者は皆労働者ではないか。終わり」。委員長は軍隊当時のことも弁明しろと言う。「軍隊当時は暴力とかいじめではなかった。教育のためで、皆上官の命令で行動したことだ」と突っばねた。

委員長は「次はDが自己批判をしてください。最初に警察官になった理由、次に人民をいじめたことはなかったか」。Dが弁明した。「私は、日本国民の生命と財産を守るために警察官になりました。国民を守ったことはありますが、いじめたことは一度もありません。終わり」。この時は、大衆もアクチーブからの反

応もなく、委員も何も質問することもなく、人民裁判とつるし上げが終わった。

作業の方は、側溝掘り、路盤拡張、それに枕木の敷設も始まった。食糧は大豆に代わって殻のままのソバが配給になった。機械も道具もないので、そのままスूपに炊き込んだ。殻を吐き出せばよかったが、なにしろ腹べこでそのまま食べてしまった。十日くらいしても大便にいかないのである。そのうちに下腹が固くなってはれ上がり、動けなくなったり食べることができなくなる者が続出した。

医務室は連日満員である。重患の者はハバロフスクの病院に毎日のように入院した。ソ連側も事の重大さに驚き、また大豆のスूपに変えた。私も殻のまま食べたが、大豆のときもいつも十日に一度くらいしか大便がなかったが、ソバのときも同じだった。

百人くらいの入院患者が出て、大隊員は三百人くらいになった。それから十日くらいたって、他の収容所から百人の転入があり、また四百人になった。

青年行動隊も解散になり、小隊も新たに編成され

た。大隊長には田村曹長に代わってAがソ連側より任命された。小隊は廃止され、四十人単位の分隊制になり、分隊長は大隊長が任命した。

転入してきた百人の中には七人くらいの講習終了者がいて、その中のEという男が民主委員長にソ連側より任命され、小隊長、民主委員長とも講習終了者で占められ、下士官以上は完全に追放された。

Eは夕食後度々集会を行い、一人で一時間も二時間もしゃべりまくった。ソ同盟指導者スターリンの礼賛であった。特にトロツキストとの闘争が強調され、収容所の運動もブルジョアジーの追放、反動の摘発、プロレタリアート団結と独裁が、A委員長のときより強調されるようになった。

作業の方もレールが敷かれ路盤を高くするために無蓋車で昼となく夜となく土が運ばれてきた。十両編成で一日十回ある。伐採に二個分隊八十人、駅舎その他の建築に二個分隊、製材所に二個分隊、主力の五個分隊は鉄道建設作業である。一両分の土を四人で降ろして、次の車が来るまでにそれを十メートルの幅にス

コップで平らにして踏み固める。それが終わらないうちにまた貨車が入る。レールが低くなれば上げなければならぬ。昼食の時間もほとんどない。立ち食いである。作業が終わって帰るときはもうふらふらである。

収容所に帰っても食堂に行く気にもなれない。一度部屋に行き十分くらい横にならなければ空腹と疲労で体が動かないのだ。よろよると歩き食堂行つて大豆のスープをすすって部屋に帰り、ベッドに横になればもう死んだ人同様だ。そのうちに方々から痛い痛いの異様な叫び声がある。直立不動の姿勢になって足がくり動けなくなつて、全身に注射針を刺したような痛みだ。特に下半身が痛い。五分前後で痛みもなくなり動けるようになる。そのうちに土を積んだ貨車がピーピーと汽笛を鳴らして走り去る。

午前二時頃だろうか、本部の作業係が一分隊集合と叫んで部屋に来た。現場まで一時間から二時間かけて、ふらふらよたよた歩いて着く。五分隊の連中が、さつき我々が収容所を出発する前に来た貨車の土を降

ろして平らにしていた。五分くらいしてから、今度は我々が土を降ろすことになった。

最初の作業は命がけである。無蓋車の側板を外さなければならぬ。高さ一メートル、長さが二十メートルくらいで、左右二枚、一車両四枚ついている。土が山盛りに積んであるので、相当の圧力がかかっている。その側板は十センチ角の角棒でとめてある。それを下から大ハンマーで打ち上げ角棒を抜かなければならない。昼は明るいから危険が少ないが、夜はよく見えない。目見当で大ハンマーを打ち上げる。二本目の角棒には相当の圧力がかかっている。棒が抜けると同時に逃げなければ、側板で頭を打ち即死なのだ。その後、他の小隊から数人が頭とか体を側板に打たれ怪我をして入院した。

一車両四人で一時間で降ろす。貨車はそのまま引き返す。一時間で土を平らにした頃、次の貨車の土を降ろすため二分隊の連中が到着する。と同時に別の貨車も到着する。

二組の貨車があつて、積むのに一時間、片道走るの

に一時間（往復二時間）、降ろすのに一時間、計四時間一日六回、二編成の貨車で一日十二回来ることになる。片道一時間として、時速三十キロだから三十キロメートル先から積んできているようだ。とすれば、三〇四收容所の人達が積み込んでいるのかもしれない。積み込むにも線路まで運ばなければならないだろうから、彼らも昼夜作業に駆り立てられているかもしれない。

こうして我々はまた二時間もかけて、ふらふら、よたよたしながら收容所に到着する。我々と入れかわるように三分隊が出発する。もうすっかり夜が明けて朝食の時間だ。一日十六時間の重労働であるが、民主委員も分隊長も作業免除であり、我々が労働している間木陰でグーグー居眠りをしている。まるで労働貴族だ。

夜間作業でも、二時間の作業に四時間もの無駄な時間を費やしている。昼間の作業も歩く時間が四時間で往復八時間、正味労働時間八時間、計十六時間である。昼間作業三個分隊、夜間作業二個分隊にして交替

で作業を行えば、毎日一人四時間の休息時間ができるし、そうすれば作業に出ても野草を取る時間もできるし、栄養面においてもだいぶ良くなる。

以前であれば、委員会や隊長会議でこのようなことは簡単に解決できた。この頃はもう作業に行くにもソ連のカンボーイ（警戒兵）もついていかなかったし、作業のこともノルマさえ達成していれば全面的に日本側に任せるようになっていたので、なおさら簡単であつたはずである。しかし、このような改善策を提案しても、反動分子にされるのが落ちである。それにこの頃は大隊員達も、ソ連側や民主委員がハラシヨラポータ（作業優良者）とデモクラート（民主主義者）を先に帰国させるということであつたが、実際はオーカ（労働無能力者）を先に帰国させることはわかつていた。

いつまでも一級、二級の体であれば、今後何年も何十年もシベリアで働かされ、最後は白樺の肥やしにされると思うようになっていた。早く帰国するには、入院するかオーカになることである。私もこの調子だと

二カ月もすればオーカになれるかもしれないと思うようになっていた。

民主運動の方はますます階級闘争が激しくなり、十日に一度くらいに人民裁判が開かれ、つるし上げが行われ、毎回二人から三人がつるし上げられた。

昭和二十三年八月十五日、解放記念日（民主教育では、この日はソ連が我々を解放した日でもあるし、連合軍が日本のプロレタリアートを解放した日で、その記念日ということである）に食堂において人民集会が開かれた。

委員長の指名で私が前に引き出された。前のときは委員もアクチーブも質問等はなく弁明だけで終わったが、この頃になって一般大衆も、アクチーブ等が言ったことに同調して、「そうだ、そうだ」とか「つるし上げろ」「白樺の肥やしにしろ」等々叫ぶようになっていた。何百人の人が叫ぶのであるからその光景は異様である。

シベリアの地で、ソ連人が裁くならまだ我慢もできるが、裁くのは日本人である。しかも、今までの部下

からである。裁かれるものは孤独であり、生きた心地がしない。弁明しても無駄で、ただ平身低頭謝るしかないのである。「今までのことはすべて私の不徳の致すところで、誠に申し訳ございませんでした。深く反省いたします。今後は皆さんのご指導のもと、民主運動のため粉骨碎身頑張ります。よろしくお願い申し上げます」「よし、わかった」「ライナ（わかった）「ライナ」の声が方々から上がる。

委員長は「山本は深く反省しているので、今後は我々の同志として認めます」と言い、これで私も反動分子ではなく同志となった。帰国のキップを手に入れたことになる。

委員長が「二分隊のF、日本の実家より手紙が届いている、渡すので前に出て来い」と言う。満場どよめきの声が上がった。日本からの手紙が来たというのは初めてである。Fは跳び上がらんばかりの喜びようである。満面笑みを浮かべて委員長の前に進み出た。

委員長はFにはがきを渡し、「全員の前で返信のはがきを大きな声で読め」と言う。Fははがきを読ん

だ。「ソ同盟で元気でいるという手紙がついて安心した。当方も皆元気でいるので安心してください。弟も四月から元気で中学校に通っています。元気で早く帰ってくることを楽しみに待っています。父より」というような文面であった。

Fが読み終わったところで他の委員から発言があり、「弟が中学校に行っていることは手紙で証明された。F、貴様も中学校を卒業しているだろう、どうだ」と問い詰められたFは「私は行っていません」「嘘をつくな」「反動だ」「つるし上げろ」、方々から蜜声が飛んだ。Fはもう返す言葉もない。アクチーブが言う「Fが行ってなくても、弟が行ってればブルジョア階級だ。反省しろ」「そうだ、そうだ」全員が叫ぶ。Fは「申し訳ございません、許してください」と深々と頭を下げた。

近頃は、人民集会で、アクチーブだけでなく一般大衆も、民主委員、アクチーブ等に同調して唱和するようになっていた。黙っていればアクチーブから反動だと締めつけられる。そのうちに、民主教育によって洗

脳され、自ら発言するようになっていた。

Fのことも情報不足で、中学校が学制改革で義務教育になったことを誰も知らなかったのである。この頃はもう下士候の下士官もほとんど一度はつるし上げられた。

大隊長も小隊長も一時は兵士によって占められていたが、月日がたつにつれて、洗脳された下士官が就任するようになってきた。

気力も体力も極限に達していた。死ぬ前に一口の米の飯が食べたい。米の飯が食べられたら今すぐにここで死んでもいい。腹いっぱいとは誰も言わない。それは到底かなわぬ願いである。昭和二十三年六月頃までは、日本に帰りたい、是が非でも帰らねばという希望と意地があったが、九月頃はもう、そのような気力もなくなっていた。労働はますます強化され、民主主義ならぬファシズムの嵐が吹き荒れた。

このように、抑留者は全員がソ連の民主教育の加害者でもあり被害者でもあった。石ころでも神にでも仏にでもなり得る。最近のオウムの事件でも、他から見

れば子供でもわかるようなことでも自分達が正しいと信じれば、あのような事件も平気でやる。

【執筆者の紹介】

大正十三年十一月

岩手県一戸町出生

昭和十五年

東京市大森工業学校中退

昭和十六年

青森県大湊海軍軍需部に
軍属として勤務

昭和十九年八月

千葉県第四航空教育隊に
入隊

昭和二十年一月

満州第四錬成飛行隊に転
属

八月

終戦、シベリア抑留

昭和二十四年八月三十日

復員 復員後開拓地に入
植農業

(岩手県 田辺 壮久)

私の太平洋戦争

福島県 小平 里美

小学校に入學して間もない昭和五年四月上旬、第二師団が中国の奉天（瀋陽）に移駐のために若松の歩兵第二十九連隊も軍旗と共に出発しました。その訳もわからぬ私達は先生に引率されて日の丸の小旗を振って見送りました。

翌昭和六（一九三一）年九月、満州事変が勃発して、多門師団の平田連隊として勇名をはせた第二十九連隊の戦死した兵士の英霊を迎えに度々先生に引率されて道路の両側に並び、ラッパの奏でるもの悲しい音色、白布に包まれ戦友の胸に抱かれた遺骨の行列は今でもまぶたに浮かびます。その頃から戦争が身近に感じられ始めたような気がします。

満州事変の翌年三月には満州国建国が宣言され、翌八年一月に満州に派遣されていた第二十九連隊が若松